入江花錦著

斷腸

特22
215

帝國圖書館藏

断腸

参圃庵主 花錦 著

明治
39 9 17
内交

譬へば火中に投ぜらる
る白百合の花——優し
き笑ひ洩らしつつ而
際ちひなして甘藷り行
劫の下に……沈ませる
煉獄の君の霊前に捧ぐ

Tears came into his eyes; and as slowly he lifted his eyelids,
Vanished the vision away, But Evangeline knelt by his bedside.
Vainly he strove to whisper her name, for the accents unuttered
Died on his lips, and their motion revealed what his tongue would
have spoken.
Vainly he strove to rise; and Evangeline, kneeling beside him,
Kissed his dying lips, and laid his head on her bosom.
Sweet was the light of his eyes; but it suddenly sank into
darkness,
As when a lamp is blown out by a gust of wind at a casement.
All was ended now, the hope, and the fear, and the sorrow,
All the aching of heart, the restless, unsatisfied longing
All the dull, deep pain, and constant anguish of Patience!
And, as she Pressed once more the lifeless head to her bosom,
Meekly she bowed her own, and murmured, "Father, I thank
thee!"

—Evangeline—

The past a blank, the future black.

Her life began and closed in woe!

序詩

やさしき菫は　星の影
笑まひ漏らして　打ち仰ぎ
ゆかしき戀の　物語に
薔薇さゝやく　花の闇
しかく映美き　園の中

Still stands the forest Primeval; but under the shade of its branches
Dwells another race, with other customs and language.
Only along the shore of the mournful and misty Atlantic
Linger a few Acadian Peasants, whose fathers from exile
Wandered back to their native land to die in its bosom.
In the fisherman's cot the wheel and the loom are still busy;
Maidens still wear their Norman caps and their kirtles of homespun,
And by the evening fire repeat Evangeline's story,
While from its rocky caverns the deep-voiced neighboring ocean
Speaks, and in accents disconsolate answers the wail of the forest.

—Evangeline—

胡蝶を友に　香を慕ひて
睡れんの君　儞が希望
求めなましそ　此の篇に

詩に貧しき　胸の絃
悲哀の曲に　高鳴るを
香なく調べし　詩の篇
涙の淵よ――血の泉

浮ばじ　優しき　星の笑
映えじ　美しき　花の彩
聞えじ　懐しき　鳥の樂
響かじ　靈しき　水の韻

さはれ　終日　終夜
悶えや　熱き　牀の上
涙かたしく　世の人に

捧げん爲の　詩の箱

希望の福音　あらずとも
快樂に飢うる　胸の邊に
慰藉の甘露　頒ち得ば
充たざらんや　余が願。

落葉の影にて

寥園庵主　花錦生しるす

篇中、曾て出版せし拙著「忍ぶ草集」「不如帰集」中の句を、處々に、多少改作して用ひたる所あり。これ強ちに心なきわざならず。冀は見ん人御高評を垂れたまはれかし。

詩中の人物

清河玄美、品子
鳴海伍左衛門、操子
浦見殿、幸枝子
緒方秋子

以上

此の稚子（わくご）未だ立たくはぐくみ終へたりとれはあらねど、頼む所ありて疾くより旅立たしむることとはなしぬ。

物に、迎へられん人の助り先導（みちしるべ）を頼らば、余が胸和がんかな。――三十八年十一月廿五日――

目次

序詩の巻……一

前編

第一章
管絃の巻……七

第二章
花蔭の巻……二三

第三章
月影の巻……四一

第四章
遺書の巻……五七

第五章

誓詞の巻……七五

第六章 寄宿の巻……八一

第七章 雪華の巻……九一

中編

(上)

第一章 家郷の巻……一〇七

第二章 卯花の巻……一一三

第三章

沈默の巻……一二〇

(下)

第四章 青山の巻……一三六

第五章 暗雲の巻……一四五

第六章 湖畔の巻……一五五

後編

(上)

第一章 富浦の巻……一六三

第二章 旅頭の巻……一七六
第三章 孤燈の巻……一九九
第四章 断腸の巻……二一五
(下)
第五章 草廬の巻……二三〇
第六章 墓前の巻……二四三
目次終

断腸

入江花錦著

序詩の巻

此處は寂びたる　壁の塌
老の松が枝　苔あをく
銀杏は　空に　聳え立ち

寂寥ふかき　常秋や、
此處は寂びたる　塋の塲
夕暮法者が　人生の
未來占ふ　悲哀の
聲かの如き　韻みつ。

悶え　悶えて　ともすれば
狂ひがちなる　都の子が
深山に奏づる　「斷腸」の

曲か　不斷の　風の韻、

（三）

此處に　冷えたる　碑の面
永劫の靜寂に　默しつゝ
刻みし文字は　薄るれど
怨みの　泪の　跡ぞ濃き。

此處に　冷えたる　碑の面
沈默やぶれて　刀の影

身に沁む窓に　永眠りたる
處女の影を　語れるに——。
小鳥が　馴れたる　飼主の
指に餌を啣む　姿の如
血汐ぞ　搖るる　胸抱き
詣でし若人！　今奈邊。

（三）

あゝをやみなき　人生の

潮　なゝたび　碑の面
環りぬ！　さはれ　吹く風の
咽ぶ韻は　絶えなくに——。
覺らぬ君を　戀慕ひつゝ
想の小草　根を深み
拔きえぬ怨　人知れず
逝きし女　憐む　人々よ。
聽きませ！　碑に　ひれ伏して

運命を捧げ　世を捨てし……

若人—「玄美」を　悲しみて

松が枝　調ぶる　哀の詩！

前編

第一章

管絃の巻

（一）

北に峨峯　西に丘

南　東に　廣き圃、

假裝の外見を　外にして

此處や　平和の　鄙の鄕。

眞金吹くてふ　吉備の國
朝日郡の　西の極、
文化の榮光を　外にして
此處や　安息の　鄙の鄕

春は　緋桃の　花の艶
秋は　小萩の　花の彩
浮ぶる　妙の　さゝ流
西ゆ　東に　流れゆく。

是に臨みて　丘の麓
右に　左に　茅葺の
伏家の　簇の　數十戶、
名づけて字を　谷の市。

（三）

伏屋の簇ゆ　北の方
古色さびたる　池の傍に
高き家屋は　此の鄕の

榮を翳せる　學園の舍。
牧場に通ふ　狹き徑
帶かの如く　環らせる
池の彼方に　聳え立つ
高き家屋ぞ　寄宿の舍。
是れに隔てる　一二町
東の方の　一軒は
此の村落の　庄屋樣

主人は　鳴海伍左衞門。
家の背面は　いと廣く
倭國　漢土　はた　西の國
名に負ふ草木　植ゑ込みて
四時薫れる　花の園。

(三)

主人　鳴海は　村民を
吾が子の如に　慈愛しみ

寶をさへも 投げうちて
村落の公益には 盡しけり。
されば 恰も 奴婢の如
郷人いたく 慕ひ寄り
名譽も 幸も はた富も
渠が肩身に 集ふなる。

(四)

仁慈に厚き 伍左衛門

鄙には稀の 雅男よ
詩歌の道を たしなみて
俳句をこよなく 好みけり。
手には鋤 鍬 腰に鎌
玉なす汗を 流しつゝ
日毎いそしむ 農夫
集へて開く 詩の宴。
農夫等が 熱心に

畫筆は　絶たん　圃の中
鍬とる間に　ものしたる
俳句を聞きて　樂しみつ。
腰折ながら　己が身の
ものせし詩を　高聲に
謠ひて漏す　顏の笑
見ては畏む　農夫。

（五）

しかく睦の　詩の宴
内に交はる　中學生は
優しき性質の　青年にて
その名を　清河玄美とぞ。
俳諧　連歌　和歌
漢詩　さては　長詩に
渠が詩才　あらはれて
名聲の聞え　高かりき。

斯れば　鳴海伍左衛門
玄美をいたく　愛しみ
詩の會毎に　招き來て
ミューズの如く　待遇しぬ。

（六）

清河玄美と　聞ゆるは
此の村落ゆ　北の方
「水成」と呼べる　孤村の兒
此村に　學びの　草枕。

寄宿にありて　學の海
文學の林を　辿りつゝ
學才や　級の　友垣に
秀でゝ常に　級長。

幼少より　海軍の
軍人たち　眺めやり
此の身もがなと　健氣にも
希望の影を　抱きけり。

心に勉勵の　鞭を打て
文學の華さく　林の邊
詩の泉を　求めんと
深くぞ想ひ　立ちにける。

（七）

玄美は　疾くゆ　管絃の
妙なる調　研究めんの
希望の錨　かたくして

さるを如何なる　故ならん
―性質か　學の　爲かそも―
渠は　あやなく　眼病みして
近眼とこそは　なりにけれ。
或日　醫師に　しか事情を
聞きたる渠や　暫時は
痛嘆の内に　送りしが
何故か　厭はん　學の海。

「時機」をのみぞ　待ちゐたる。
時しも　詩の會に　よりて
鳴海の宅に　足繁く
通ふ程なく　鍵を得て
「時機」の門を　開きたり。

鳴海が　いたく　愛しむ
その娘操子と　宵々に
管絃　活花　はた　點茶

學ぶ事とは　なりにけり。

（八）

二人は　疾くも　節進み
段を重ねつ　術たけつ、
渠等が奏づる　調には
澄みて響くよ　神の樂、
譬へば　天の　樂堂に
靈琴列ぬる　女男の星、

操子やあはれ　宵明星よ
玄美やあはれ　曉の星。
しかくすさびの　日々〳〵に
渠等二人の　親交は
いとどけ厚く　なりゆきて
恰も眞實の　兄と妹。
玄美が　敬愛の　言の葉に
語り出づれば　操子女は

「隔て心の　おはすよ」と
疎遠　寂焉　想ふ迄に。

第二章
花陰の巻
（一）

琴の調の　終へしまゝ
玄美操子は　愛の手を
共に携へ　おもむろに
伴れ立ち出でぬ　庭園の中。

花爛熳の　庭園の中
おぼろに霞む　月の影
薫の中に　仄めきて
あゝ艶なりや　夕の姿。

「心」形なす　池の面
眠の領に　入れるめり、
凪ぎて靜けく　眞澄鏡
何處さまよふ？　波の夢。

二人は樂しく　庭の石
彼のもの此のもに　傳ひつゝ
默して竟に　佇みぬ
かすむ櫻の　花の蔭。

（三）

玄美近遠を　眺めつゝ、
理想の園に　入りし如
快樂の色を　顔の上
湛へながらに　言ひけらく。
『あゝ艶なりや　春の夕
花は漏らせり　愛の笑
おぼろに月も　匂へるよ
天地なべて　美の裝。

神の靈鏡に　映すとも
曇やあらぬ　聖き愛
胸に懷ける　此の身等の
夫れにも似たる　今宵哉。』
傍近く　坐を占めて
同じ眺めに　みとれつゝ
笑まへる操子　悲しげに
常に似げなく　應答へけり。

『げにや　妙なる　景色かな！
さはれ　何時しか　移らひて
花の名殘は　春雨の
もの儚なきを　如何にせん。
しかく　互に　いと熱く
聖き想を　通はせて
固く心に　懷くとも
御身は……　遠き　旅の君。

學を終へて　家郷に
歸りましなば　水泡や
消えて跡なき　夕の空
仰ぐ此の身ぞ　忍ぶ草。
共に學びし　琴の曲
妾やひとり　奏でつゝ
絃は斷たんの　夕來ずや
想へば沈む　妾が心！。』

『何をか孃よ　宣はす？
悲しき胸を　閉ぢましね、
聖き心の　何時しかも
移らふべきの　事あらん。

いかに遙けく　山と川
雲はた　水を　隔つとも
互に懷く　貞心や
何どか隔ての　有らんやは。

處女心の　御身こそ
しかは思さめ　如何なれば
此の身に無情　胸あらん、
な宣ひそ　憂き事を。

いと闊活き　性質にます
御身宣ふ　言葉とも
想はれぬ哉　うとましや』
斯くと　玄美は　慰めつ。

（三）

語りたげなる　顔にして
彼女　玄美を　視し時よ、
薔薇色美しき　頬の上
さと紅の　流れけり。

少時　ためらひ　俯向きて
黙しゐたるが　さる程に
渠の手を把り　言ひ出でき、

『玄美の君よ　妾は……』と。
再び、ためらひ　言ひ淀み
池の面を眺めいる
操子の姿や　盆栽の
匂ひは高き　薔薇の花。

（四）

玄美が　彼女の　愛しき手を
固く握りて　何となく

心足りせぬ　言の葉を
漏らすにつれて　語るらく。
『玄美の君よ　あゝ君よ
學問にすぐれ　み心の
優しくおはす　君と爾
語り得るこそ　嬉しけれ。
よすがと頼む　生母――
兄弟だにも　有らずして

想ひ　寂しき　籠の鳥
それにも劣る　妾の身。
いかに　千萬　山と川
雲はた　隔つとも
心の空に　隔てなく
妾を愛しみ　賜はりね。
飛鳥の淵瀬　常なくも
富士の高根の　動きなう

心に深く　胸に秘め
よすがと頼ぐは　御身のみ。
玄美の君よ　あゝ君よ
恥しかれど　數ならぬ
妾が「兄君」と　なりまして
愛で給はじや　永久に！』

（五）

玄美は　やをら　應答へける

『いかでか　孃よ　御身のみ
寂しき庭の　人ならん
悲しき窓の　人ならん。
三日は　永き　花の艶
脆きは　何れ　世の姿
詩人の胸に　絕えまなく
響けるとかよ　哀の曲。
さはれ　靜かに　思されよ

落つる木の葉の　音さへも
心樂しき　音樂者の
耳には　妙に　響くとよ。
心樂しく　おはしなば
眼には　映らん　希望の火、
耳には　響かん　幸福の韻、
―人の世　心の　儘にこそ。
悪口性の　人の世に

「兄」よ「妹」よと　誓ひなば
風聞やつらく　語りあふ
夫れだに辛く　なりゆかん。
疑ひ　誤解の　雲深く
貪慾　嫉妬に　ともすれば
狂ひ勝なる　世の状態を
心しましね　思されよ。
まいて　親しく　胸と胸

包隱む隈なく　明しあひ
諸ひつ　笑みつ　睦るゝを
なさずもがなよ「誓」など』。

（六）

折から　玄美は　立ち起り
想に沈める　操子の脊
輕く打ちけり『永久に
聖く祉！』とぞ　低語きて。

操子も　やをら　立ち起り
『松の常磐の　變りなく
御身の愛の　み手に！』とて
玄美の腕に　縋りけり。

第三章

月影の卷

（一）

何時しか　月日過ぎゆきて
吹き來る風の　うら寒く
下界の衣　金色に
移り變りし　秋の晩。
文月頃ゆ　かりそめの
病の床に　起き臥して
惱み居たりし　操子女は

愈よあつしく　なりゆきぬ。
初めの程は　月の夕
玄美と共に　琴に倚り
同じ調べを　奏でつゝ
漏したりしよ　頰の笑。
或は　涼しき　夕まぐれ
清水流るゝ　さゝ川の
岸邊に出てゝ　往く水に

流したりしよ　胸の雲。
さはれ　涼しさ　増すにつれ
頭は重く　胸晴れず
人に顔容　見られんも
可厭くこそは　なりにけれ。
薔薇にも優る　顔の艶
漸次に褪て　蒼白く
みどり匂へる　月の眉

愁ひの雲に　鎖されぬ。
優しさ映えし　瞳には
涙の影の　仄めきて
玄美に會ふだに　何となく
羞はしげに　装ふなる。

（三）

今はた病の　牀の上
臥したるまゝに　十日まり

食物をも食まず　唯だ獨

寂しく　沈默の　憂き姿。

譬へば　晩れゆく　春の夕

雨になやめる　海棠の

色香やう〳〵　移らひて

散るをし待てる　風情哉。

あゝ死の影は！　頃日

寄せぬ　映りぬ　操子の上へ

あゝ「薄命」の　憂き頁

捲かんの光景よ　彼女の身。

(三)

黄金の光　冷やけく

名殘惜しげに　西の空

燿き過ぐる　夕まぐれ

玄美　彼女を　見舞ひたり。

南向きなる　窓の下

操子は　白き褥の上へ
眞白の衾につゝまれて
辛く微睡み　居たりける。

桔梗一本　枕邊に
床には　秋の　七草を
いと花車に　活けなして
點茶の調度　位置ぞよき。

醒めしめんも　本意なしと

玄美が　しばし　顔の姿
看視り居れば　夢みけん
佗びしく浮べぬ　笑の涙。

肌に響く　うら寒き
野分の颪は　さゝと暴れて
櫻の枯葉　散りまがひ
寂寥ふかし　室の中。

（四）

操子醒めて　苦しげに
玄美の姿　眺めつゝ
羞はしげに　面そむけ
默して　再び　目を閉づ。

時しも　醫師　入り來り
やをら診察ひ　出でゆきて
家內　親族の　人々は
傍近く　寄り纒ふ。

夕の幕　垂れ込めて
かぼそく　淡き燈灯に
彼女の顏や　もの凄く
「死」の色かくや？と　想はれし。

（五）

操子は　またも　眼を開き
乳母まぢかく　呼び寄せて
いとど微かに　顫へたる
聲して何をか　語る時。

乳母静かに手號して
居合へる人の何れにも
少時次ぎなる室の邊に
避けましねとぞ請ひ出でき。

斯くて程なく諸人は
彼女の室にかへりしが
操子の瞳眸！玄美の眼！
映りあひたる其の時よ。

あゝその時よ　その瞬間よ
蕾ながらに　うら若き
處女は！　あはれ　操子女は！
下界の息を　絶ちにけり。

玄美の顔を　眺め入り
色蒼褪めし　唇に
寂しく　いとも　冷やけき
笑を浮べし　儘にして。

天の宮殿に　かへらんと
囀り絶えし　籠の内
ぬけ逝く愛しの　小鳥の
魂の如くや　昇天りけん。

名残の色は　そが儘に
あえかの口に　止めつゝ
永劫の熟睡に　あはせたる
眼は端眼の　態にして。

靈よ常磐に　淸けかれ
夢よ堅磐に　安かれと
あたりの人が　祈りたる
聲も通はぬ　姿にして。

（六）

悲しく　あるは　嬉しげに
さゝと搖れたりし　眼の光
窓洩る風に　燈火の

消ゆるが如く　絶えはてぬ。
小き胸に　秘めゐたる
戀も　希望も　悲哀も
愁ひ　悶えも　跡絶えて
「さらば！」を告げぬ　久遠に。

（七）

燈火暗く　永久の
眠の樂園に　入りたりし

あはれ處女の　室の内
照して　凄し　月の影

第四章

遺書の巻

（一）

此の夕　乳母は　さる室に
玄美ひとりを　招き寄せ

いと秘密やかに　深沈やかに
何をか少時　語りけり。
さて　先程　操子より
臨終の際に　托されし
遺書の　二通を
玄美の手にぞ　渡しつゝ。
『されば　御身の　寫眞を
柩の中に　入れまほし、

賜ひねかし』と　請ひけるが
玄美は　頓に　承諾みつ。

（三）

その後　三日目に　賑はしく
野邊の埋葬　いとなまれ
操子の死骸　送られき
寂しき丘の　墓の下。
玄美は　亡せし　孃の魂

行くへを照らす　白張の
揺らぐ光影を　仰ぐにも
心の闇に　迷ひにき。
香の烟も　一しほに
供への花も　一きはに
愁ひ悲しむ　顏とこそ
眺めたりけれ　咽びつゝ。
はた　葬送の　鐘の聲

響く梢に　悲哀を
謳ふ會葬鳥の　哀の唄
聞きては胸を　抱きけれ。

（三）

葬送終へて　歸り來し
玄美　寄宿の　窓の下
新たに起る　種々の
想の胸を　抱き泣。

同じ學窓の　園の友
夕の寢床に　臥せし後
紀念の玉章を　とり伸べて
再びあはれ　讀みにけり。

（四）

「三日は　永き　花の艶
脆きは　いづれ　世の姿と
教へ給ひし　み言葉を
今こそ實にと　仰ぐ哉。

豐裕の家庭に　産れ來て
賢しくおはす　御身をば
よすがと賴み　まゐらせて
愛情得る　妾の身。

神の庇護　いとあつく
此の身にあまる　幸の園
平和の庭に　夢みつゝ
憂事知らぬ　妾の身。

御身の厚き　み心や
心に沁みぬ　身に沁みぬ
此の世まかるも　永久に
何時かは忘れ　まゐらさん。

さはれ　妾は儚なくも
去んぬる月の　初めより
はしなく病の　手に觸れて
絆はつらき　病床の上。

想ひにまかせぬ　頃日
胸に浮ぶよ　手に縋り
薫る櫻を　眺めつゝ
み教へ仰ぎし　花の蔭。

御身に從ひ　まゐらせて
彼面このもに　逍遙ひし
凉風通ふ　野邊の徑
淸き流れの　岸の上。

琴のみ調べ　八雲琴
活花點茶　今一度
御身の傍に侍らひて
ものしましかば　如何ばかり。……
「人生　心の儘に」とぞ
敎へたまひし　み言葉は
日毎　終日　終夜
忘れまゐらす　時なきも。……

歸らぬ旅の　旅衣
もはや着るべき　運命にや
日々に此の身は　憔悴れゆき
人に見られん　影もなし。

仰ぎみすれば　空の月
此の身の臨終　告ぐる如
もの寂しげに　身を照らし
袖には繁し　露の珠。

語らふ友の　あらなくに
夢の浮き橋　辿る如
想は遠く　飛びゆくよ
怪しき空の　雲の上。

暫時にても　癒えもせば
此の胸聞え　まゐらさん
拙き筆を　許しませ、
病の牀にて　操子より」。

玄美　わななく　手を支へ
今しも　身をば　打ち忘れ
再び　三度　繰りかへし
讀みぬ！　叫びぬ！　泣き伏しぬ！」。

（五）

渠はその身に　かへる時
他の一通の　玉章を
あゝとり伸べて　ゆくりなく

狂へる如く　讀みにけり。

「戀しき　戀しき　あはれ君
熱き想の　燃えまさる
胸を抱きて　默しつゝ
死の手を待てる　妾の身。

想まゐらす　數々は
山より高く　海原の
底ひも知らず　深かれど

今はた　儚き　身の運命。

既にいとしき　「妹」の孃
おはす御身を　儚くも
慕ひまゐらす　妾こそ
愚なりけれ　淺ましや。

さはれ　此の身や　不如歸
血に鳴く想　胸の中
御身は　さこそ　知りまさめ

聞えじ　言はじ　記すまじ、
臨終の際の　床の上
ものしまゐらす　遺書の文字
眺め給はゞ　妾が君よ
み覺りましね！　此の想。
もはや　歸らぬ　旅衣
着るべき時は　眼の前
あはれ迫りぬ！　寄せて來ぬ！。

立つべき時ぞ　今宵哉。
此の世の願望よ　「余が妹！」と
唯だ　み心に　思してよ、
幸くおはしね　永遠に
平和ておはせ　永遠に。
下界に一人の　信頼者とぞ
縋りまつりし　清河の
玄美の君に　まゐらする、

臨終の牀にて　操子より」。

あはや　玄美の　眼より
涙は降りぬ！　雨霰
新たに湧きて　流れゆく
涙の泉　溢れたり。

渠　突爾に　立ち出でゝ
犇と玉章　抱きつゝ
駈せぬ！　丘なる　亡孃の

無聲に冷たき　墓の許。

第五章

誓詞の巻

（一）

墓のみ前に　清河は

人心なく　打ちまろび
指に土をし　穿ちつゝ
祈禱捧げぬ　叫ぶ如。
『操子の孃よ　亡孃よ
謝すべき詞　知らぬ哉
才に貧しく　學淺き
愚かの身をも　あゝしかく！。
孃よ　病の　牀の上

朝な　夕なに　語るべき
友だにあらで　如何ばかり
悶えましゝや　唯だ獨。
優しき孃が　胸の中
語らず　言はず　秘めませる
想の焔！　燃ゆるとは
あゝ知らざりし　己が身よ。
悲しき哉や　余が胸に、

「敬愛」の扉 固くして
御身の熱き み愛情を
仰ぐ隙さへ 非ざりき。

まいて 此身や 籠の鳥
既に御身も 知りおはす
吾が身の「妻」と 定まれる
あはれ 處女の 在りければ。……

孃よ 許しね 愚かの身

おん身が永刧の「兄」たるを
神のみ前に 誓ひなん
憂き波いかに 暴ぶとも。

今より永刧に 身の運命
孃がみ許に 捧げなん
苦痛の淵に 余が往かば
孃よ 翳しね 希望の火。

「現幽」の籬 高くとも

御身のみ靈　余が心
互に翅ひろばへて
會はなん　語らん　雲の上に。
御身眠りね　上天の園
此身辿らん　下界の野
深く想を　結びつゝ
み許の園に　入らん迄」

(二)

玄美はやをら　身を起し
「墓標」の面を　眺めつゝ
石かの如く　立ち居しが
西方より降りぬ　流れ星。
折しも　空は　おぎろなく
北斗は冴えて　風寒く
雲や無心の　額にして
死せるに似たり　天と地。

第六章

寄宿の卷

(一)

時間の流れ　移らへど
玄美の涙　淀みなく
玄美の悶　弛みなし、

されど　默して　秘めゐたり。

晝は學園の　庭の中
快樂の外觀を　裝ひつゝ
夕は寄宿の　床の中
無限の熱涙　かたしきぬ。

夜毎玄美は　夜半の空
孤身悄然に　丘の上
辿りゆきては　亡孃の

「墓標」眺めて　佇みぬ。

（三）

ある夕　渠は　家郷の
その身の「妻」と　定まれる
いとしの孃に　送るべう
遲るゝ筆に　認めき。

「朝な夕なに　吹く風の
いともの凄く　肌に沁み

世は寂寥の　秋の晩
御身やいかに　在すらん。
ものゝ悲哀は　さなきだに
ひときは深き　頃日
此の身の心に　野分風
暴ぶる憂を　知りますや。
言はぬは　言ふに　勝るとし
覺りながらも　なか〱に

沈黙はつらき　此の胸よ
愚痴と　な輕蔑　給はりそ。
漏さじ　聞えじ　ものさじと
想へど　あはれ　默しなば
代りて陳べん　石もなく
誰かは傳へん　此の想。
さはれ　御身の　平和を
破りまつると　想ほへば

筆しも折れて　紙破れて
躊躇ひにしむ　文字の跡」。
それより詳さに　操子女の
逝きにし次第　遺書の由
秘むる限なく　記したり
涙に濡れし　紙の上。
さて後「斯かれば　哀なる
此の身の胸を　推察してぞ

親と親とが　定めたる
縁しの結び　解きましね。
絶ち給はれよ　縁の糸
余終生まで　獨身の
生活しなば　如何ばかり
慰藉の泉に　息ひえん。

さはれ　縁しを　斷たばとて
互に抱ける　胸の愛

如何でか失せん　移らはん
惱みなましそ　痛みそよ。

他家の家庭に　入りまして
奏で給ひね　幸の曲
此の身は　芝生の　廬の內
み空眺あて　合奏さなん。

同じ家庭に　笑みあふを
誰かは忌まん　さはれ孃！

希望 理想の 影消えて。
闇に囁く 身の運命。
嬢よ 雄々しく 同情の
眞澄の露を 愛の瓊
賜はれかし」と 懇切に
熱き心を 認めぬ。
燃ゆる想の 溢れたる
震へ亂れし 文字の跡

誰かは 覺り あらざらん
誰か 覺らざる 胸の中。

第七章

雪華の巻

（一）

秋は何時しか過ぎゆきて
吹雪亂るゝ冬の空
往來の道に關の戸の
塞りて稀よ人の脚。
寄宿の友は日曜の
休息の幸の一日をば
勇氣振はん兎狩
皆伴れ立ちて往きにけり。

清河玄美ははしなくも
先つ頃よりかりそめの
脚氣を病みて足重く
孤身殘りて留守居人。
降りみ降らずみ雪の華
飛びかふ窓に身を倚せて
み空の景色を眺め入り
來し方往く末想ひ出づ。

（二）

「余が胸　あまり　無情か
孱弱き處女よ　品子女は
その身の緣を　同情の
犧牲と捧ぐる　能はじや。

さはれ　余のみ　下界にて
彼女の「夫」にも　あらざらん
共に「知覺」の　有らざりし
幼き時代の　緣なれば。

野邊に山邊の　旅の空
露けき草に　宿らんと
儚き希望　抱ける身。
既に　運命を　捧げし身。

憂事知らぬ　品子女を
悶えの淵に　余の共
沈めえざりな！　余が願
何どか無情き　品子女に。

然なりよ　責任を　身に帯びて
余が友垣の　好き君と
樂しき家庭　つくらさん
さらば　余さへ　安らかに」。
渠は　想ひの　種々に
群り起る　胸抱き
「我」を忘るゝ　折からに
玉章着きぬ　品子より。

（三）

搖るゝ想を　靜めつゝ
やんら開きて　讀みにけり、
初めの程は　昨日今日
寒さきびしき　事の由。
家族そろひて　健かに
春さり來れば　學び終へ
榮光の衣に　包まれて

かへり來ますを　待てりなど。
玄美は　更に　讀みゆきて
「二伸」と記せる　文字の姿
眺めし時よ　突爾に
蒼褪めたりき　顏の色。
「遲るゝ心　勵まして
把りては落つる　水莖を
抱きて崩るゝ　机の上へ

淚の露に　濕しぬ。
ものして捨てつ　封じては
またもや破りつ　幾度か―
あはれ　御身の　御心を
推し侍らぬ　身ならねど。
み許しましね　妾が君よ
一日も早く　聞えんと
想ひ馳すれど　露の瓊

はふり落つるを　如何にせん。
處女心の　淺ましさ
斯くとばかりは　想きや
君よ　幾度　愚かなる
妾を憂しと　思しけん。
想ひ出ては　忍び泣
微睡む隙も　束の間も
先き立つ涙に　絆されて

あはれ　今日とは　なりにけり」。
讀みゆく玄美の　顏の色
いよゝ蒼褪め　渠の身や
もの狂はしく　戰慄きて
文へかねたる　風情哉。

(四)

人の數にも　入りがての
拙き妾の　身の上に

み心惱まし給ふこそ
胸に響きて畏けれ。
さはれ　妾の　脊の君よ
―今はた如何で　脊の君と
ものしまゐらす　身にやそも―
玄美の君よ　妾が君よ。
（緣しの結　解きましね）
（絶ち給はれよ　緣の糸）

あゝ此の文字を！　此の文字を！
拜しまつりし　其の時よ……。」
渠は　伏したり　書簡の上
淚は　流がれぬ　書簡の上、
次ぎの行の　五六行
破れて　文字の　見えわかず。―
「必ず妾の　身の上に
惱ませ給ふ　事あらで

み心のまゝに（文字にじみ
さだかに見えず）おはせかし。
妾は　せめて　此の書簡を
君が紀念と　身に添へて……
いとも戀ひしく　なつかしき
御身の影を　偲ばなん」。
もはや　玄美は　支へかね
犇と玉章　抱きてぞ

狂へる如く　打ち仆れ
叫びの聲を　漏らしける。
時しも　吹雪　一しきり
激しく窓を　襲ひ來て
響きのひまゆ　友垣の
聲は聞えぬ　門の口。
玄美　やう〳〵　心づき
起ちて玉章　整へつ

その身の姿　正しつゝ
迎へに出でき　笑裝ひ。

（前編終）

中編

（上）

第一章　家郷の巻

（一）

學を終へて　清河は
五年他郷に　送りたる
父母おはす　家郷に

榮光を翳して　歸り來ぬ。
父母いかに　喜びし
兄弟いかに　笑まひたる、
村人いづれも　渠の身を
崇め稱讃へぬ「學者」と。
權左　吾作の　子供等も
助六　初も　集ひ來て
「先生樣！」と　崇めつゝ

賑はしかりき　渠の門。
小學校を　終へし者
それだに稀の　此の村落よ
「榮譽」の冠　「學才」の環
あはれ落ちたり　渠の上。

（三）

稱讃の唄の　聲みてる
窓に向ひて　玄美こそ

悲しき空の　雲の上
想ひの翅　馳せにけれ。

誰かは知らん　渠の胞
誰かは見けん　袖の露
あゝ人知れず　玄美こそ
寢衣の袂を　搾りけれ。

渠　兄弟の　面の笑
噫　父母の　額の色

樂しとのみぞ　眺めしか？
嬉しとのみぞ　仰ぎしか？。

その身の榮光を　謳ふなる
稱讃の聲を　聞くにつれ
來し方　將來　想ひ出で
玄美の嘆き　いや深し。

第二章

卯花の卷

(一)

卯の花白く　咲き匂ふ
里川堤　みぎひだり
玄美品子は　手を把りて
夕日を肩に　語りゆく。

春に遅れて　哀の唄
曲もあはれに　鶯の
謠ふよ　低韻く　いと低く
渠等二人に　咽ぶ如。

逍遙ひながら　行く程に
何時しか　山の麓なる
山井の下に　出で立ちて
二人は共に　佇みぬ。

(二)

垂首れながら　品子女は
溢るゝ涙　押し拭ひ
いと斷れ〴〵に　語るらく
『何どか　苦しめ　參らさん。
さはれ　御身よ　兄の君！
妾が父母の　問ひまさば
此の身は如何に　答ふべき？
想へば辛き……其時よ』。

『さばかり　心な惱めそよ
東都の旅に　立たん時
爾が父母の　御許に
文して事狀を　明白さなん。
年考いませる　御胸にも
いかで涙の　なからんや、
此の身を哀れと　思しなば
な儚さを　喞ちそよ。

無下に沈憂みて　おはします
御身の姿　袖の露
眺め入る身は　如何ばかり……
御身の夫れに　勝るなれ。

品子の孃よ　余が妹よ
「妹背」の緣　斷たばとて
忘れなましそ　永劫に
誓りは深き　兄と妹。

健かにこそ　在されよ
幸多かれと　祈る身は
山河遠く　隔つとも
何時か御身を　忘るべき—。

言はじと想へど　愚痴そゞろ—
あゝ知りますや　己が胸
謝罪の　血は燃えて
血管や裂けんの　熱沸くを—」。

語りし玄美が拱きし
腕に撞と品子女は
仆れかゝれる儘にして
暫時はあはれ咽び泣。

(三)

『あゝ兄君よいざさらば
涙しぐるゝ窓の下
妾は御身の平和を

祈ぎまゐらせて侍らなん。
雲の八重路を隔つとも
迫めては音信の玉章を
あはれ恵ませ給ひてよ
健かに在せ!……御身こそ』。
やをら二人は歩み出で
來し路の方へ向ひしが
露草しげき徑暗く

姿は消えぬ　闇の中。

第三章

沈默の巻

（一）

鐵も鎔けんの　夏最中

夕立過ぎし　庭の面
綠の草木　露の瓊
彩をし餝す　夕ま暮。
簷の金露草に　垂りたる
風鈴の音　細やけく
池の噴水　凉しさを
增して妙なり　庭の景。

（二）

やう〳〵日光かくろひし
西に向へる竹の椽
持つとしもなく團扇をば
手にして玄美ぞ佇める。
湯上り衣涼しげに
おぼろに暮るゝ池の面
眺め入りつゝ唯だ獨
想や深き額にして。

肉よき頰や何となう
胸の悶えを語るめり
艶香は褪せて蒼褪めて
窶れの影を浮べたる。

(三)

今しも全く暮れ果てゝ
燈籠の光領狹く
庭の面わをうばたまに
鎖して迫りぬ闇の影。

玄美は　尚ほも　動きなく
垂首れゐたるが　垂乳根の
母の優しき　聲聞きて
さる室にこそ　入りにけれ。

(四)

玄美が入りし　室の中
在すは渠の　父と母、
常にはあらぬ　面わにて

いと厳かに　見ゆるなり
母なる君は　嬉しげに
そと愛しみの　膝進め
先つ日聞えし　彼の事を
如何に考ふ？と　語ります。
されど　玄美が　應答せず
手を拱きて　居たりしを
眺め在しし　父の君

怒の默然ゆ　破れたり。
『玄美！　汝は　如何なれば
いかなる事の　狀ありて
承諾まざるぞ！　余が命を、
知らずや　父の慈愛。
東の都に　登りなば
誘惑の手　多かれど
其をし恐れて　爾云ふに

非ぬことをば　知らざるか。
此の身が縁を　獨定めしが
汝の胸に　不滿して
しかく結婚を　避くるにや？
はた道德ならぬ　心にか？。
此の身はいとゞ　齢たけて
妻を娶りし　悔深し、
今はた　汝が　しかなすを

如何で看過ごし　得べきやは。
「學の時代」と？　さはあれど
結婚の式を　擧げしとて
汝が心の　固からば
何かは障の　有るべしや。

老年に痩せたる　膝の上へ
一日も早く　愛孫をば
抱かましかばと　願ふ身の

心は汝に　通はじや』。
斯くと語りし　父の君
應答いかにと　窺へど
玄美は　固く　默しつゝ
手を拱きて　居たりける。

（五）

母も種々　諭せしが
親に嬌しき　渠ながら

東風に吹かるゝ 馬の耳
夫れか 否じか 應答せず。
父は怒に 燃えにけん
さゝと立ち上り 室を出で
彼方の室に 移りしが
玄美は 尙ほも 默しゐつ。

(六)

少時時へて 憂はしく

玄美は母に 語りける
『母君！ さこそ 此の身をば
不孝の兒ぞと 思すらめ。
さはれ 不孝の 罪をさへ
敢てなす身の……母君よ
此の身は既に 亡きものと
思し召されて 給はじや。
「學の道を 知り初めて

親に仕ふる　人の道
知らずなりし」と　父上の
あゝみ言葉よ　：み言葉よ。……
文の學林の　泉の邊
詩の冠を　求めんと
願ふ此の身よ　現今にして
妻をし娶り　能ふやは。
あはれ　此の身や　頃日

慈愛厚き　み言葉に
反きまゐらせ　一言の
應答聞えん　詮ぞなき』。
さては　心中に　叫ぶらく
『胸や裂けんの　此の想！
知らずて在す　父と母
想へば……あはれ　儚なしや』。

（七）

斯くて文月末つ方
生れし家郷を後にして
學の扉開かんと
玄美東都に登りけり。

儚なき渠を想ひつゝ
縁の糸を結び得て
泣きにし許嫁の門の許
亂るゝ足を運びてぞ。

覺らぬ渠を慕ひつゝ
熱き想を語り得で
逝きにし亡嬢の墓の許
湧き來る涙注ぎてぞ

(下)

第四章

青山の卷

(一)

家郷遠く　二百餘里
雲井隔つる　東の
都に　玄美が　登りしゆ
もはや五年　過ぎゆきぬ。
その身の母が　親戚なる

浦見巖の　許に居て
學の庭に　通ひつゝ
渠は辿りぬ　文學の園。

(二)

渠の希望や　想ふ如
その身の運命　描ぬきて
亡孃が永眠れる　墓の邊に
燒きて埋めん　願ひのみ。

狂者と人は嘲らん
沒常識と輕侮まん、
されど空吹く風とだに
響やあらじ渠の耳。

日每終日只管に
いそしみ學ぶ榮光見えて
級の友に優れてぞ
首席は渠に讓られぬ。

（三）

浦見の娘幸枝子は
渠が閑暇の折ふしに
窺ひ寄りて學才深き
玄美に教を請ひ居たる。

或は歌などものしては
互に送りとり交し
懷し優しの批評など
樂しげにこそ爲し居しか。

されど玄美は　一度も
彼女の居間と　定まれる
室に入りたる　事もなく
近づき寄るを　厭ふめり。
夕餉終りて　少時を
隣れる公園に　手を曳きて
逍遥せんと　幸枝子が
請ふを避けしも　幾度。

(四)

渠は休息の　日曜日
青山墓地の　こゝかしこ
孤身さまよひ　夕ま暮
歸るをこよなく　樂しみき。
景色妙なる　爲かそも
人足稀なる　爲かそも
西詩の一篇　携へて

辿りゐたりき　唯だ孤身。
猛夏の初期よ　常の如
朝よりして　友もなく
生木の下に　佇みて
西詩を誦しつゝ　居たりけり。
時は移りて　入相の
光斜めに　映ゆるとき
羞らはしげに　笑まひつゝ

幸枝傍に　歩み來ぬ。

（五）

悪魔の息に　觸れし如
玄美　もの憂く　想ひしも
避くる道さへ　あらなくに
俯向き居たり　憂はしく。
彼女近づき　手を握り
何をか語る　折からに

田舍よりして　歸り路の
巖の姿　仄見えぬ。
渠驚怖きて　垂首れつ
更に見やりし　其時は
もはや姿は　消え失せて
灰色深し　空の雲。

第五章

暗雲の卷

（一）

浦見常より　注意して
日々の玄美の　擧動を
窃かに窺ひ　居たりしが
怒に燃えぬ　渠の胸、

彼の日仄かに眺めたる
青山墓地の黄昏の
光景のみかはさる人の
秘かに告ぐる書簡を得て。

浦見少時は疑問と
迷ひの闇に蔽はれて
思慮に惱みしが
儚なき斷定を抱きたり。

情に熱く學才深く
心明哲の渠ながら
誤解の雲に鎖されて
聖き眼や曇りけん。

(三)

竟に浦見はゆくりなく
玄美の父に何事か
丈にも餘るいと長き
玉章をこそ送りしか。

回答の玉章　さる程に
渠の手許に　駈せ來り
その夜　玄美をさる室に
嚴かにこそ　招きけれ、
巖のあはれ　顏の上
憤怒の焰　燃えあがり
眼は血ばしりて　すさまじく
小鳥を摑む　峯の鷲

『玄美！　汝は　今宵より
此の家を見捨て　何處とも
想ふが儘に　出でゝ往け！
汝！　余が家の　者ならず』

（三）

想ひがけなき　渠の言！
「夢か　戯言か　空言か」
しかく玄美が　聞きたるも

げにや宜なる　事にこそ。
玄美は　少時　應答せず
夢の浮き橋　辿る如
忙然の見えに　立てる如
いと訝かしく　見揚げたり。
怒に燃ゆる　渠の顔
うら恐ろしき　額にして
静まるべくも　見えざれば

玄美　決めぬ　心の中。

（四）

浦見再び　言ひけらく
『心に曇を　懷ければ
應答なさんの　言葉だに
非ざるべきぞ　道理や』。
玄美の顔は　突爾に
死せるが如く　變りゆき

悶えの影を　漏さじと
秘むる身體は　わななきぬ。

（五）

室の外傍に　佇みて
秘かに由を　聽き居たる
幸枝子あはれ　ゆくりなく
狂ふが如く　駈せ入りつ。
父の傍に　坐を占むる

母に縋りて　跪づき
崩れ仆れぬ　膝の上
叫びもやらず　咽びつゝ
慌しくぞ　駈せ入りし
幸枝の方を　そゝと瞥やり
默して出づる　玄美こそ
手負の獸の　風情哉。

第六章
湖畔の卷

(一)

耳を聾き　眼を射りて
もの騒がしき　街の中
睡眠の床に　靜まりて
一きは寂びぬ　夜半の空。

悄然の影を　地に曳きて
垂首れ勝に　歩みつゝ
想ひ忍ぶが　丘の下
玄美は孤身　辿り來ぬ、

やをら佇む　湖の畔
千々に碎くる　月の影
眺め入りては　今更に
無限の想ひ　止らず。

(二)

屠の場に　追はれゆく
牛にも似たる　態にして
少時　眺めに　萎れ居し
渠　突爾に　叫ぶらく、

『人の姿を　寫すべき
術は巧妙の　現今にして
何どか「心の眞」をば

寫すに難き？　人の世や、

「心の眞」曇れるか
「眞の光」映なきか
「眞理は最後の　勝利者」の
意、味よ　竟に　亡びしか、

寫して見せんの　余が心
誤解の雲に　鎖されぬ
胸より胸に　此の想―

否ず！　何をか　表彰すべき。
余　現今悲しむ　時期ならじ
苛責の撈籠よ　怒の矢！
疾憎の毒焔よ　呪の火！
いざや！此身に　降り注げ！。
余　永久に　黙すとも
石は　代りて　もの言はん！』
渠は　唇　噛みしめて

撞と仆れぬ　畔の上。

（三）

さては　思慮も　本性も
絶えしか　あはれ　伏せしまゝ
息さへいとゞ　絶え〴〵に
死せるが如き　姿かな。
斯くてよ　水面　月の面
眺め居たるが　やう〳〵に

その身を起し　聲低く
渠は　呟き　漏しける。
『眞澄の月よ　眞心の
化したる瓊よ　あゝ爾は
何どしか無情く　もの凄く
此の身の顏を　照すなる？
あはれ　過ぎにし　春の夕
彼の亡孃とともに　手を把りて

花の蔭より　眺めたる
爾は　快樂に　笑ましめし。
さるを　その年　果てずして
永刧に眠りし　孃の上
冷たき影を　灑ぎては
此の身に鑄りき！　征矢の跡。
まいて　今宵の　爾が面
見るにえ堪へぬ　もの凄さ！

死の浪寄する　淵の中
竟に此の身を　誘ふにや』。

渠は　叫べど　月もだし
再び呼べど　應へなく
湖の水面を　眺め入る
折しも淒し　鐘の音。

(中編終)

後編

(上)

第一章　富浦の巻

(一)

玄美は　先つ日はしなくも
誤解の征矢を　身に負ひて

湖上に碎くる　月の影
眺めてよりぞ　病み伏しぬ。

されど醫師を　招くべき
はた尚ほ食物を　求むべき
代金さへ有らぬ　病の身
寄すよ迫るよ　飢の風。

渠はその身の　生命にも
替難てにこそ　想へりし

書籍をも　あはれ賣り拂ひ
暫時の食に　當てしとか。

「飢」と「渇」の　領の中
わびしき棟を　列ねたる
貧民窟の　簇に入り
辛き暮を　爲しとか。

「飢」と「病」の　牀の上
あはれ信頼者も　あらぬ身の

来し方 将末 想ひては
玄美の胸や 如何なりし。

（二）

信念の 厚かれど
『斯くても「神」の 在すや?』の
疑ひの雲 群るも
宜なる哉や 渠の身の。
しかく苦しき 谷の底

悶えの沼に 沈みてし
身の儚なさを 同情やる
友ぞ救助の 手を伸べつ。

（三）

友は 玄美の 事状
知らんの方向に 迷ひしが
辛くも尋求め 訪ひて
慰めたりき 朝な夕。

日毎に　夜毎に　訪ね來て
情愛け厚き　言の葉の
數々深き　同情に
渠や涙を　拂ひけん。

語らず　言はず　秘めたりし
「沈默」の扉　ゆるまねど
漸次友の　慈悲
忝けなくぞ　受けにける。

竟に　玄美は　先つ日ゆ
友の勸誘を　諾ひて
富の浦なる　海の岸
逍遙ふ事と　なりにけり。

（四）

平和の囀　空に滿ち
詩幸の影　浦に舞ひ
人の情愛の　暖かく
太古の光景よ　富の浦。

文華の榮光に遲れゆく
怨はあれど慰藉の
泉溢れて睦の音
あゝ歡喜の聲ぞ滿つ。

一面遠き海の彩
青き姿の鏡かや、
抱きて映る三面の
山には里見の古跡蒼し。

朝の霧に　漕ぎ出てて
夕榮のせて歸り來る
漁夫の小舟の櫂の音
靜かに響く詩の海。

白衣裝へる　詩の神の
崇き姿それの如
け高き富士の微笑を
浮ぶる光景の妙なりや。

夕は　清き　漁の灯
彼沖　此磯に　ゆらめきて
星の宮殿の　宴會にや
漏るゝよ　聖き　愛の詩。

鐵さへ鎔けん　夏の日も
涼しき風の　慰藉に
姫百合薫る　岩蔭の
端睡や安き　避暑の浦。

（五）

富士の高峯ゆ　舞ひ出でて
み空渡らふ　愛の神
秘めます琴の　み調べか
漏るゝよ　靈しき　幸の曲。

仰げや　高き空の彩
美の神裝ふ　羽衣の
綾うるはしき　雲間より
閃く「自然」の　詩の影。

望めや　遠き海の彩

脱つる隈なく照り渡る

妙なる日影の映うけて

燿く艶彩の涙の華。

(六)

あゝ詩の影　涙の華

絶ゆる間なき浦にして

朝な夕なに　磯の上

病の身をば　横へつ。

波猛けり來る　巖の上

横に踊る　蟹の姿

湖に搖ぐ　藻鹽草

眺め暮しつ　終日を。

あるは　漕ぎ出で　漕ぎかへる

蜑の釣舟　眺めやり

地網曳く人の　磯唄に

耳かたむけつ　砂の上。

第二章

巖頭の巻

(一)

窃かに名のる　松の聲

靜かに奏づる　浪の詩
夕日ななめに　落ちてゆく
安息の浦に　響くなり。

葡萄色なす　いさゝ浪
搖ぐや天の　畫神の
秘めの畫筆を　濯ぎしか
映光美はしや　潮の彩。

(二)

回想の血潮　熱き胸
抱きて玄美　唯だ獨
海の面わを　望みつゝ
佇みにけり　巖の頭。

慰藉や富の浦ながら
日々の煩悶の強くして
窶れ痩せたる　身の姿
哀に映す　水鏡

（三）

西なる空を　眺めては
冷たき影を　抱きしめ
北なる山を　仰ぎては
あつき姿を　追しきぬ。

しかく其の身を　忘れつゝ
想の翅は　西に北―
永劫に冷たる　墓の下
永劫に涸ざる　涙の上―。